その先にあるもの

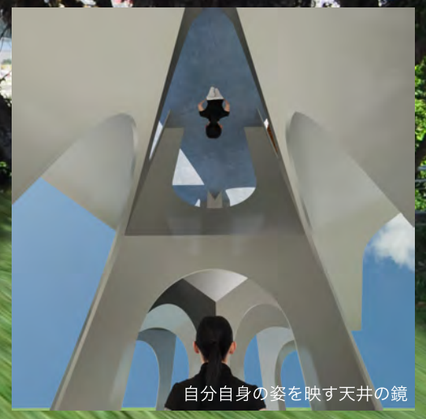
戦跡である海軍壕の山の頂上に建築する展望台休憩施設。この建築を壕の先にある建築として位置付けたいと考え、壕の洞窟の形状とリンクするアーチで構成していきます。

壕を見学した後、階段、スロープのアプローチを上り、アーチの抜けから風景を見渡します。その景色には海や山だけでなく、街があり、場所によっては、海への眺望を遮るような建物もあります。しかし、それも戦争を経験し、復興した沖縄の姿です。このアーチから見える景色全てが大切な風景と感じられるような建築にしたいと考えました。

この建築の天井面の一部には、鏡を貼ります。天井を見上げるとそこには自分の姿が映ります。この建築を通して、本当に見せたいものは、この場所に立つ自分自身であり、その足元の地面です。

歴史と場所と人を結びつける。それがこの建築の目標です。

壕へと下りていく階段


自分自身の姿を映す天井の鏡

□敷地について

計画地は旧海軍壕公園の山の頂上に位置します。現状は劣化した木の床材と小さなベンチがあるだけです。

その場所に数時間、無防備な状態で立っているだけで日焼けしてしまいます。まずは、日陰をつくることが必要だと考えました。また、階段から敷地まで上ってみると、眼前に海や街の美しい風景が広がります。このシークエンスも活かすべきだと感じました。

□建築の構成

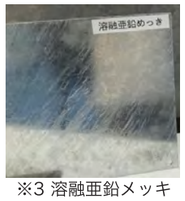
整備目的である展望・休憩の機能のため、眺望の確保し、アーチに屋根をかけていきます（日陰をつくる）。

まず、薄い鋼板のアーチによって眺望を確保します。(※1)そして、アーチ自体で自立し、その上に屋根をかけられるよう、アーチの鋼板をジグザグに配置します。(※2)

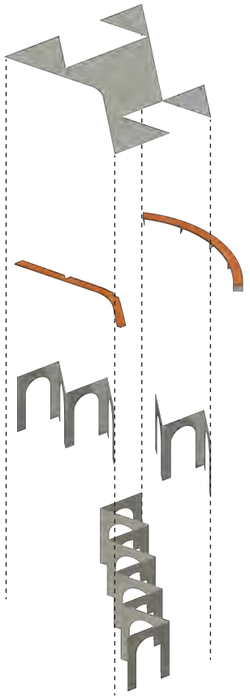
そうすることによって、アーチの間からも眺望が確保でき、その上に屋根をかけることができます。鋼板は県内で調達できる上、耐久性を考慮し、溶融亜鉛メッキとします。(※3)

※1 鋼板アーチ

※2 鋼板の配置



※3 溶融亜鉛メッキ



□屋根

屋根の一部（中央部）の天井に鏡を貼り、来園者、来園者の立つ地面を映し出します。

□ベンチ

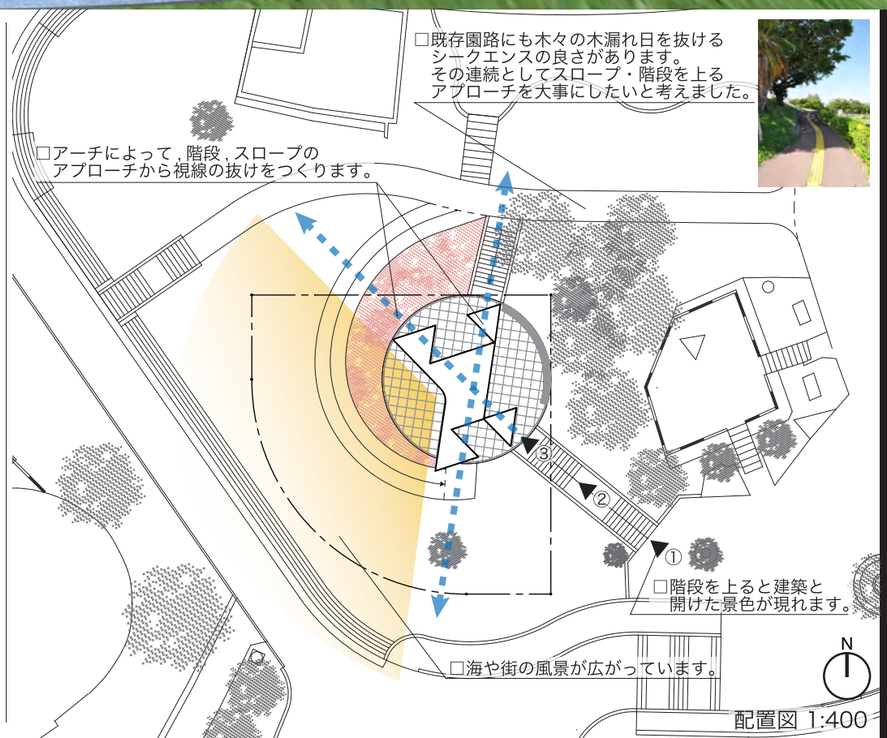
来園者が腰掛けるベンチ。座面は木仕上げとします。東側のベンチは既存樹木の木陰が庇の代わりとなります。

□アーチ

来園者は壕のつづきのようにアーチの下を通り抜けます。階段・スロープの登り口からアーチの軸線が伸び、高台から見渡す「風景と壕」＝「現在と過去」をつなげます。

□仕上げ

アーチ、屋根は 19mm の鋼板とし、仕上げは溶融亜鉛メッキとします。メンテナンス、メッキの均一性を考慮し、現場溶接はせず、すべて工場溶接とボルト留めを想定しています。



①階段下から見上げる

②階段中腹より
徐々に建築の姿が現れてくる

③階段上部より
アーチの抜けから風景が見える

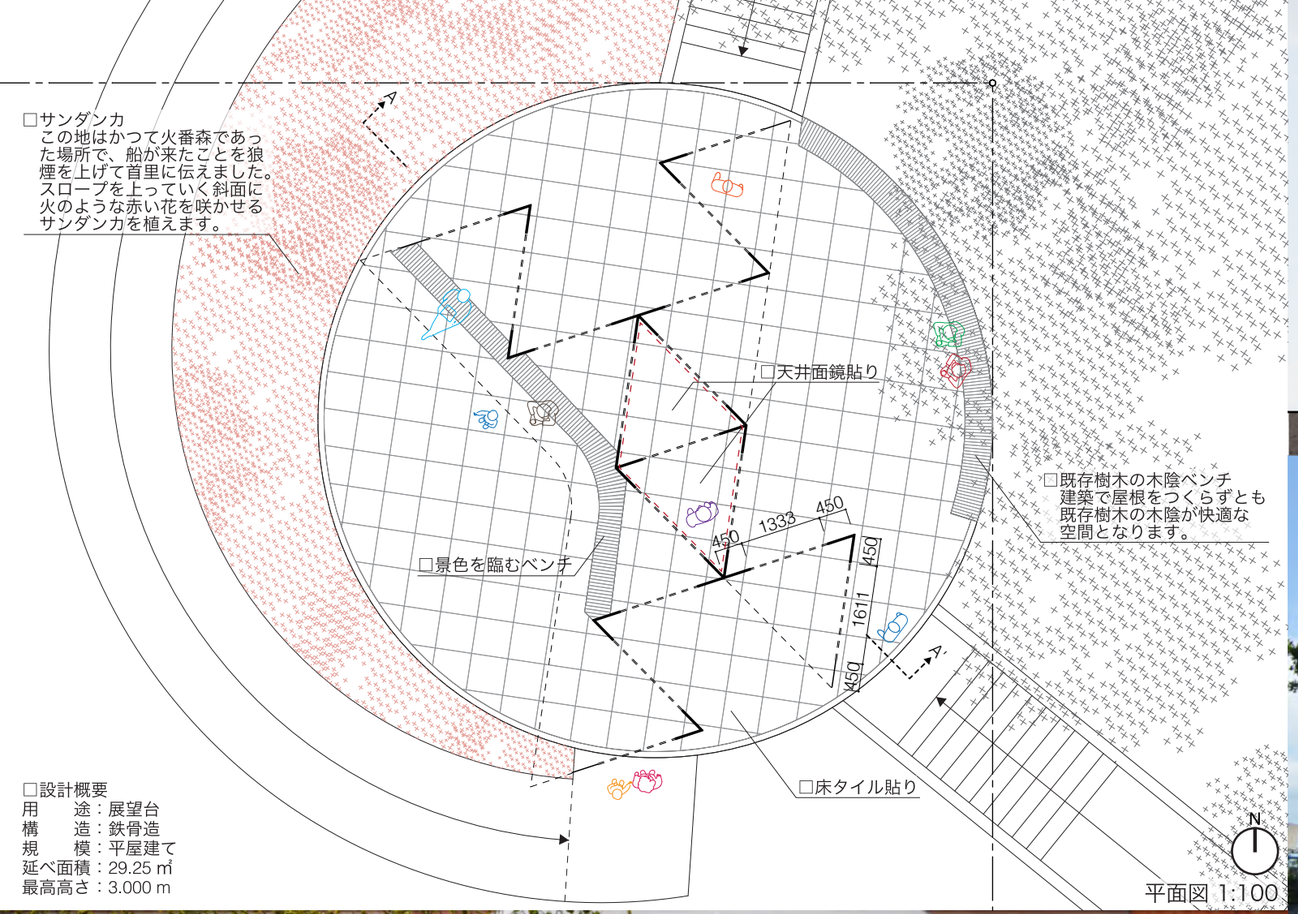
□サンダンカ
この地はかつて火番森であった場所で、船が来たことを狼煙を上げて首里に伝えました。スロープを上っていく斜面に火のような赤い花を咲かせるサンダンカを植えます。

□天井面鏡貼り

□景色を臨むベンチ

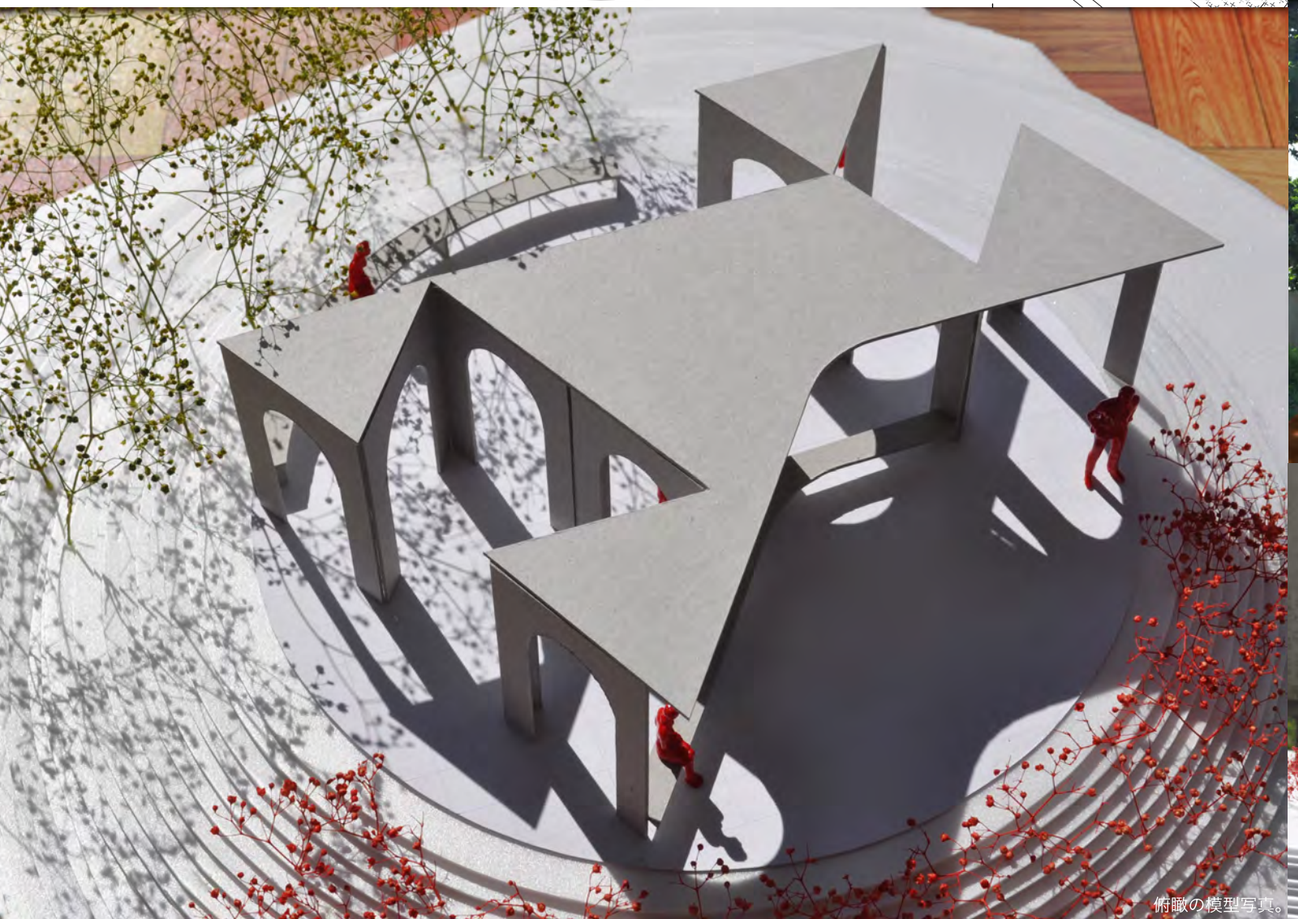
□既存樹木の木陰ベンチ
建築で屋根をつくらずとも既存樹木の木陰が快適な空間となります。

□床タイル貼り



平面図 1:100

□設計概要
用　　途：展望台
構　　造：鉄骨造
規　　模：平屋建て
延べ面積：29.25 ㎡
最高高さ：3.000 m



俯瞰の模型写真。

□先端部水切り

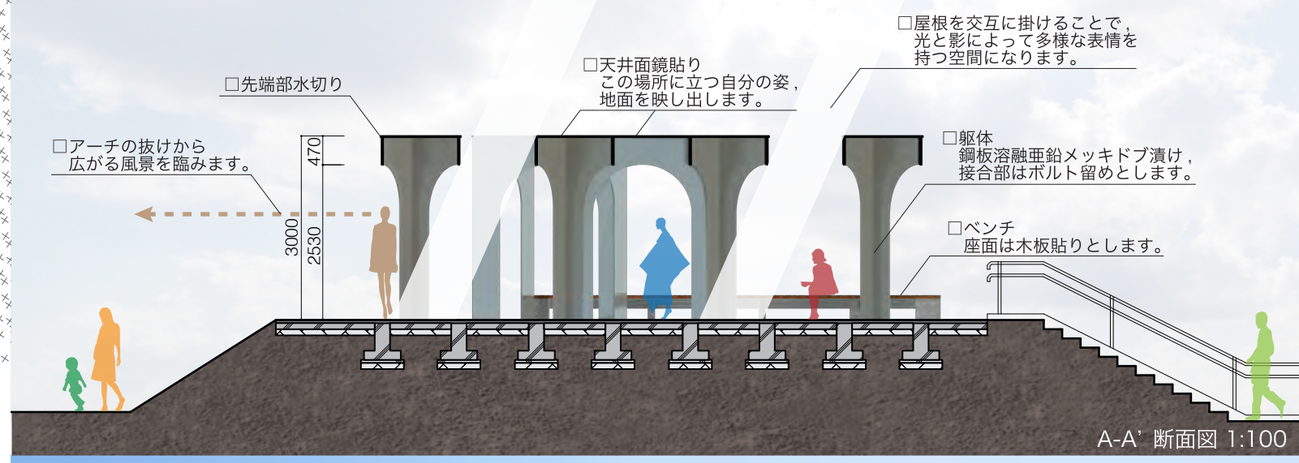
□アーチの抜けから
広がる風景を臨みます。

□天井面鏡貼り
この場所に立つ自分の姿，地面を映し出します。

□屋根を交互に掛けることで，光と影によって多様な表情を持つ空間になります。

□躯体
鋼板溶融亜鉛メッキドブ漬け，接合部はボルト留めとします。

□ベンチ
座面は木板貼りとします。



A-A' 断面図 1:100

斜面に植えたサンダンカが火番森とイメージをつなぎます。

既存の樹木がベンチに木陰をつくります。

アーチが屏風のように風景を縁取ります。

アーチは動線であり、風景を切り取る窓であり、壕とこの場所をつなぐものでもあります。

ベンチと庇がアーチ壁の振れ留めの役割も果たします。